

こども 教育も 文化

第12号

も く じ

いつまでつづく？ 米作り
ぼくの新任研
教師の一分
おみやげは何にしようかな
「あしたはてんきた」と子どもたち
宮城の教育遺産 11
わが姿の点描
民権教師の歩いた道

小野寺勝徳：1
高橋 研一：8
佐藤 正夫：9
高橋 洋子：11
横沢 文質：16
大村 榮：18

いつまでつづく？ 米作り

〜1+19回の米作りをふりかえって〜

小野寺 勝 徳

はじめに

上の3枚の写真は、小学校の子どもたちが植えた稲と専業農家の方が育てた稲を並べて比べたときのものである。品種は、写真1と3が「ひとめぼれ」で、写真2は「みやこがねもち」。稲刈りの前後に、稲の違いと、どちらの稲が自分たちで育てた稲かを考えてみた。すると、ほとんどの子どもたちは、根に土がたく



写真1 1998年の稲
…小牛田小

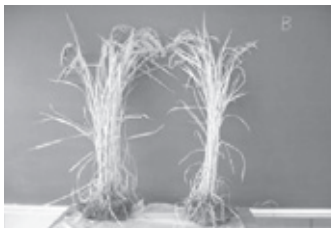


写真2 2008年の稲
…松山小

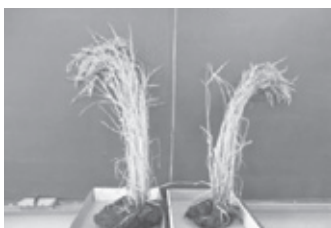


写真3 2012年の稲
…鹿島台小

さん付いていて、茎も太くて数も多く、籾の数も多い左側の稲が専業農家の方が育てた稲で、自分たちは右側の方だと答えていた。その理由は、自分たちは初めて米作りをしたのだけれども、専業農家の方は毎年米作りをしているからよい稲を育てることができたというのがほとんどだった。普通に考えれば、その通りだと思う。しかし、実際は、3枚の写真全て、左側が子どもたちが植えて育てた稲である。普通に考えるとそんなことはないと思ってしまう。ほとんどの子どもたちは、「えっ。なんで。」と疑問を持つ。中には、稲刈りで稲を十分さわっていたにもかかわらず、自分たちの刈っていた稲と違う方を選んでしまう。違いは、栽植密度である。左側は1株に1本だけ植え、子どもたちの手植えで株と株の間は30cm(疎植：写真4)。それに

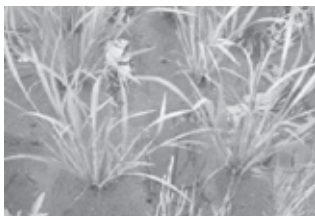


写真4 2006年6月 疎植

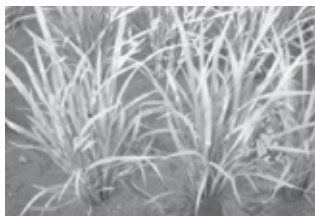


写真5 2006年6月 密植

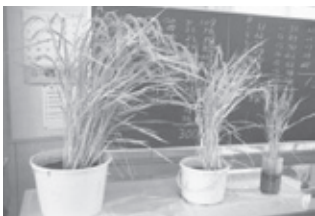


写真6 2008年：松山小

対して、右側は田植え機械で植えたもので、1株に3〜5本ずつ植えられて、株と株の間は横25cm、縦15cmの間隔になっている（密植：写真5）。ではなぜそのようなことが起こるのだろうか。

稲は、1粒の籾から芽を出し、「分けつ」（茎を増やす）して100本になり、10000粒まで籾を増やす力を持っている（写真6）。本数が少なく間隔も開いている（疎植）と葉を横に広げて分けつしていくので、日光を受ける体勢もよくなる。さらに、根もよく伸びるので、茎も太くて倒れにくくなる。しかし、密植の場合は、稲の葉同士が交錯して日かげを作ってしまうため、光合成の効率がよくない。また競争しあつて伸びるため、茎自体は細くなり、草丈が85cm以上になると倒れやすくなるとも言われている。

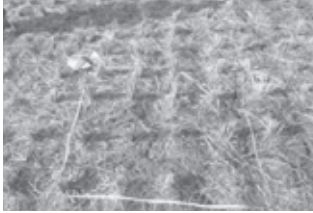


写真7 2011年：松山小1㎡ 16株



写真8 2011年：松山小1㎡ 24株



写真9 2006年7月

（栽植密度の違いは写真7、8、9参照）

1993年の大冷害のときには、一般の水田で1反（約10a）当たり3俵半（210kg）しかとれなかった水田が多かったが、1本植の水田では8俵半（510kg）もとれていたようだ。同じ品種の稲であっても、人間がどのように育てるかによって、稲が発揮する能力は異なるようだ。

これまで何回か子どもたちと一緒に米づくりを進めてくる中で、稲を育てるためには、本当の意味で「総合的な力」が必要なのではないかと思うようになってきた。稲の生理をよく理解することから始まり、天候、気温、温度管理、土づくり、施肥や農薬の使用（量や時期）、水の加減、栽植密度、作業技術、水路の管理、販売等を一人の農民がすべて自分で判断し、作業しているのは、まさに「総合」そのものだと思った。

私は、今年度で小学校の教員になり31年目になる。そのうち、半分以上の年数を学校での米作りに取り組んできた。

私の勉強の出発点は、『逃げる民』（鎌田慧）を読んだことがきっかけである。出稼ぎの農民が、都会の現場で亡くなったり、行方不明になったりしていた。その人々の足跡を追ったルポルタージュで、それを読んだときに、他人事に思えなかった。自分の家も兼業農家であり、8反5畝（約85a）の水田を耕作する農業とともに、祖父の代から「桶職人」として働くことで生計を立てていた。父も桶職人であったが、「高度経済成長」とともに化学

製品の普及が始まり、桶の需要は減り始めていたため、その後、タイル工の技術を身に付け、風呂やトイレなどの工事を扱うことによって、出稼ぎをしないで地元で生計を維持することができた。

一方、米中心で生計を維持していた近隣の専業農家は、『減反』の始まりとともに、米価はあまり上がらなくなり、そのままの経営面積では生計を維持できなくなってきた。しかし、それは農家がさぼっていたからそうなのではない。朝から晩まで重労働を重ねて、さらに機械化を進めるために「兼業収入」をつぎ込んでまで、「家産」としての水田を維持し続けてきたのである。

「農業問題」というのは、農家を作り出した問題ではなく、資本主義経済発展の中で、農業と工業（企業）の発展の問題であることに気付いてからは、歴史学、経済学、社会学等を学ぶことの重要性を実感させられた。

学習を進める中で、今の農業、農家の現状をよくするために、「農政」がよくならなければならないと思った。しかし、授業の中で、「農政」を分析してみたところで、子どもは関心を持たず、理解もなかなか深まらなかった。低学年を担任したときには、「農業」の何を学習したらよいのかも分からない状態だった。かろうじて2年生の社会科で「農家の仕事」を扱う単元があったけれども、そこでは農政についてはほとんどふれることはなかった。

1 米作りの始まり

1987年(5年目)、大和町立吉岡小学校で2年生を担任したときに、学校の空き地に穴をほってブルーシートを敷き、その上に土を入れて田んぼを作ったことが小学校での米作りの始まりだった。そこに水を入れて田植えや、稲刈りはしただけども、その後、どのような授業をしたのかは、思い出せない。

1991年(8年目)、松山・三本木両町小学校―組合立伊場野小学校に転任した。ここでは、5年生が農家の水田で田植えと稲刈りを行っていた。しかし、私は1年生の担任で、米作りに関わることはなかった。1992年4月、松山三本木両町小学校組合立伊場野小学校は廃校になり、その場所に「松山町立下伊場野小学校」が開校した。そして、1995年4月、1年生を担任することになった。

私が初めて疎植の稲を見たのは1980年だった。宮城教育大学の先生に「疎植」(1株に1本だけ苗を植え、株と株の間を離す)の水田を見せていただいた。その稲はササニシキだった。自分の家の水田の稲との違いに驚いた。早速、父親に話してやってみようとしたのだが、「今までいろいろやってきた。その結果、今やっている機械植が一番いいのだ。今さら手植えで1本しか植えないのは、やる意味がない。」と言われた。そこで、「田植機で植えられない所だけでもいいから……。」と

ねばったところ、「排水路側の人が通らない所だったら……。」と言われた。早速、田植えの後、「すまっこ」(端の角の部分)に弱々しい苗を1株に1本ずつ数株だけ植えた。その年、「社会科学総合実習」の授業で、私が植えた1本植の田んぼを、疎植の研究を続けてこられた先生や、初めて疎植の稲を見せていただいた先生にも見ていただいた。さらに機械植の稲との違いを隣の田んぼの持ち主の方に認められ、父親も態度が変化し、「すまっこ疎植」を続けていた。

一方、宮城教育大学の公開講座で「アイガモ農法」の田んぼを見学した。田んぼにアイガモを放して除草する農法だ。「稲を食べられることもあるが、田んぼに行く楽しみがある。」と農家の方は話していた。1枚の田んぼで、「疎植とアイガモができたら……。」と思い始めた。また「農政」を吟味するだけでは稲作農業はよくならないとも考え始めていた。卒業論文の調査で南郷農協を訪れたとき、当時の農産課長さんに、「猫の目農政」って、知っているか。猫の目のようにくるくる変わるという意味だけれども、それだけでは半分しか分かったことにならないんだよ。農家を減らすという点では一貫しているんだ。その方法がくるくる変わっているだけなんだ。」と教えていただいた。

その後、農業をやめさせ、農家を減らすことが目的ならば、農業をやめず、農家・農民を減らすようにするために何ができるかを考えることが大切なのではないかと思いはじめた。つまり、

「日本の食糧自給率を上げる」ことだけが大切なのではなく、「1人1人の自給力と持久力をつけたいのではないか」と考え始めた。

「1本植とアイガモ」、アイガモたちは機械植の「密植」だと稲の間を通れなくなるが、疎植であれば「縦横無尽」に田んぼの中を泳ぎ、歩きまわり、子どもたちも田んぼや稲に興味を持つのではないかと思った。

1995年4月、1年生を担任することになり、担任することになった子ども達の保護者の中に、学校の近くにちようどいい広さの田んぼを所有しており、雑誌「現代農業」を購読していて、疎植やアイガモ農法についても理解を示してくださる方がいた。早速、種まきから米作りを始めることにした。苗は学校の近くに住む子どものおじいさんにビニールハウスで育てていただいた。田植え、そして、アイガモの進水。毎日のように子どもたちや地区の人たちが田んぼに行つてアイガモを見ていた。その翌年も持ち上がりになり、その田んぼで米作りに取り組むことができた。

さらに、1997年には4年生を担任することになり、新田開発の学習とともに、3年生と一緒に米作りに取り組むことができた。

2 小牛田小学校での米作り

(1998年4月〜2004年3月)

1998年4月、小牛田小学校に転任し、2年生を担任することになった。しかし、小牛田小学

校では米作りをしていなかった。学校の北側に2枚の水田があったが、転任したばかりの私にはどうすることもできなかった。最初の懇談会の際に「米作り」のことを話したところ、いろいろ調べていたとき、学校のすぐ北側の2枚の水田をお借りすることができた。また、苗作りも地元の家の方をお願いしたところ、快く引き受けていただき、米作りを始めることができた。持ち主の方に代かきまでをしていただき、その後の管理は、私がやることになった。自分の土地ではないけれども、だれにも気をつかわず、思う存分米作りができることが、大変だったけれども、やりがいがあった。

3 松山小学校での米作り

(2004年4月〜2012年3月)

2004年4月、松山小学校に転任した。松山小学校は、農協青年部の協力で長年米作りを続けていた。その年、私は1年生を担当することになったため、水田での米作りは、田んぼの一角に十数本植えただけだった。翌年、5年生を担当することになり、早速米作りの中心になっていた方に、苗作りを「ばら蒔き畑苗」でなく「ポット苗・プール育苗」でできないか相談し省力化した苗作りが実現した。

6年生を担当したときには、休耕田で野菜作りをした。全員で同じ作物を育てるのだけではなく、「う・my農園」と名付けて、自分の土地を決め、

そこに自分で決めた野菜を育てることも取り組んだがあまかった。基本的に田んぼの土と畑の土は違うので、簡単に今年の水田、来年は畑というような『転作』はできないことを実感させられた。

4 鹿島台小学校での米作り

(2012年4月〜)

2012年4月、鹿島台小学校に転任した。旧鹿島台町のときから鹿島台には学童農園があり、児童はそこで作物を育てる体験をしてきている。5年生は1aほどの田んぼを3学級で分けて田植100人の児童にもつと広い田んぼで思う存分米作りをさせたいと思っていた。4月に行われていた家庭訪問で訪れた1軒のお宅には、コンパインがあった。偶然、子どものおばあさんとお会いし、米作りのことを話したら、すぐに携帯電話を取り出し、「先生、ちょっと待ってて。いまおじいさんに聞いてみるから。」と言って、連絡を取ってくださった。後日、連絡があり、結局、その田んぼをお借りして、田植えから稲刈りまで体験させていただけることになった。2013年度のおもな学習内容は以下の通りである。

(1) 学童農園での田植え

5月、学童農園での田植えをした。

□ 歩くときが一番大変でした

1時間目に学童農園に行つて田植えをしました。田んぼの中に入ったとき、いっしゅん「ドボン」と入っ

たのでびっくりしました。田んぼに入る前は「いやだなあ。」と思ったけど、田植えをしている間に「楽しいなあ」と感じました。次は雑草ぬきが楽しみです。

(2) バケツ稲の土、代かき

近くの農家の方からバケツ稲用に田んぼの土をいただくことができた。田んぼの土は代かき前の土にし、学校で水を入れてシャベルや手で土のかたまりがなくなるまで混ぜた。代かきを手でやることで、土の変化を実感させたかった。

□ 田植えの準備

2時間目に田植えの準備がありました。今日は土をこなごなにするだけでした。土に水を入れるだけで、少し変わるんだと思いました。土に水を入れないと風で土がとび、ちよつといたかったけど、水を入れると土もとはなくなっていくので、水があるだけでも変わるんだということを実感しました。今度は手で土をこねると言っていたので、少し楽しみます。

(3) バケツ稲と田んぼの稲の観察

夏休み前に、バケツ稲と田んぼの稲の観察をした。夏休み中はバケツ稲を自宅に持ち帰り、出穂と開花の時に記録することを課題とした。

□ 6月25日

今日、3時間目に稲の観察をしました。茎の数は10本ありました。へんな虫もいて、定規を入れたくありませんでした。長さを測ったら、30cmほどありました。日かげにずっとおいてあったので、全然生長していませんでした。日なたに置いたらけつこう育ちました。日光を当てるとこんなになっちゃうのかと思いました。

□ 7月17日

今日、稲を見に行きました。手で植えた稲は色がこけて、機械で植えた方が色がうすかったです。田植えをしたときは、稲が小さかったのに、今は稲が数十本にもなっていました。歩いていくのはつかれるけど、稲を見て帰るといい気分になります。

□ 9月13日

2時間目に稲の観察をしました。稲の長さをはかりました。91cmでした。前に観察したときよりもとても生長していました。夏休みのときは実の部分が青かったけど、今は少し黄色になってきました。稲の本数は20本でした。

(4) 学童農園の稲刈り

□ 雑草だらけだったので

今日、学童農園に行つて稲刈りをしてきました。最初は雑草だらけだったので、どれが稲でどれが雑草なのかよく分かりませんでした。たおれている稲もあつたので、雑草といっしょになって、よく分からなくなっていました。

(5) 農家の水田の稲刈り

学童農園での稲刈りのあと、いよいよ自分たちで田植えをした広い田んぼの稲刈りをしました。

□ 稲で稲を束ねていました

田んぼで稲刈りをしました。麻ひもを使って稲を束ねました。でも大人の人は稲で稲を束ねていました。刈つて束ねるまで、友達のおじいさんは約10秒位でした。私たちががんばつて刈つて束ねるまで、1分くらいはかかりました。つぎに、束ねた稲を杭に積み上げていきました。私はみんなが束ねた稲を杭の所に持つて行く作業をメインにしてみました。

(6) 「手植え」(疎植)と機械植(密植)の稲の比較 (11月14、15日)

稲刈り前に田んぼからぬいてきていた2株の稲を見たり、さわつたりして違



写真10 2013年の稲

いを見付けた。子どもたちは、土の量、根の広がり、茎の数や太さの違いを見付けた。さらに、籾が何粒付いているかを数えた。その結果、左側のAは3023粒(穂は38本)、Bは1808粒(穂は26本)だった(写真10)。そして、農家の方が育てた稲がどちらなのか考えた。

○ 農家の稲がAだと思つた理由

・ 農家の稲はAだと思えます。たくさん実つているからです。プロの農家の方たちは、たくさん植えたり、機械で植えているので、たくさん実つたんだと思います。Aは根がしっかりとついでいて、Bは根がはつていなかったのです。土がAよりついていないのだと思いました。私たちが植えたのはBで、手で植えたから間かくがずれていたたりするので、ひよろひよろなのだと思えます。

● 農家の稲がBだと思つた理由

・ 農家はいっぱい植えなければかせげないから、多く植える。となり同士が近く、栄養があまりとれなかつたから。

5 兼業農家「小野寺」の現状

これまで、学校での米作りを通して、農業や農家、農民に対する理解を深め、日本の農業に負荷をかけないような「消費者」になり、日本のまともな農業・農家・農民を支えていけるようになればという理想(スイスの小学生の消費行動：値段が高くてもまず国産品を先に購入する。)を描き、米作りを中心にした授業に取り組んできた。私自身、自営業の父親の職の半分分の農業のさらに一部を担うことで、自分の自給力と持久力も高めていこうと思つていたので、勤務時間後の時間で「農業」もできるのではないかと考えていた。

しかし、学校の現場も農政と同じように、「総戸」「選択」「やる気(意欲)」という「競争」原理が入り始め、「減反」を思わせる学校の統廃合、そして「生産者米価の算定基準」の度重なる恣意的な変更と米価の下落は公務員の「査定制度」「教員評価」「賃金削減」や「人事院勧告の完全実施(マイナス勧告の時)」と重なつて見えてきた。農業を見続けてきたことから、南郷農協の農産課長さんが言われていた「農家をやめさせるといふ点では一貫している」と言う分析は、今の教育政策にもあてはまつているように思い始めた。

昨年8月、父親が入院し、退院してからも治療を続けながら何とか米作りをしようとしていた。そして、翌年の4月、米作りは無理だから委託するのだと私は思つていたのだが、「種まきをするからこれないか。」と母親からの電話があつた。それ

を聞いて、急につらくなってきた。父親のあの体調で米作りをするのは無理だし、私自身、今の学校での勤務状況から父親の代わりに農作業をやることはかなりの負担になると思っただけだ。「なぜ早く委託することを頼まなかったのだ。」と父親に強く言い、叔父叔母を頼つても米作りをしようとしている父親のことをよくは思えなかった。正直なところ、病院との対応だけでもかなり疲れてもいた。

これまで、「農業・農民理解教育」を進めてきたつもりでいた自分が、父親に「米作りをやめて、頼め。」と言わざるをえない現状は何とも言いようがない厳しいものがあつた。父親は「田んぼを広げて、1町歩にするのが長年の夢だった。」と母親に話していたそうだ。それが、1町1反にまで水田を増やした矢先に自分で耕作できなくなつてしまった無念さも分かる。しかし、私も54歳になり、体力の衰えとともに、介護、看護などに時間を費やさなければならなくなつてくると、実際に自分が体を動かして作業しないと進まない学校での米作りも今まで通りできなくなるのではないかと不安になつてくる。再入院前に、父親は農業委員会に行き、これまで農作業を部分委託していた方に来年度から全面委託することの届け出をしてきたという。息子としてはありがたいが、農地解放のあと、兼業ではありながらも、自作農として持続してきた米作りが、私の代で自作農ではなくなり、形式的には「地主」になつてしまつたのか……?。

もしれないと思うと複雑な心境だ(3代目の何とか……?)。

これまで19年間、米作りを中心とした授業を通して、たくさん子どもたちの感想や意見を聞かせてもらい、父母、家族の方たちからの協力も得て、米作りを続けることができた。

しかし、TPPや大規模化、法人化などをみていると、数年後には、水田は外国の企業に買われてしまい、そこで働けるのは、持ち主の国の人になる可能性もあるのではないかという心配もできた。「自由化」というのは、強い者にとつて自由ということでないだろうか。

おわりに

タイトルの「いつまでつづく? 米作り」は、学校での米作りだけではなく、私の家の水田での米作りのことでもあり、日本の米作りのことでもある。

戦争の苦しみを体験した人々が少なくなり、農地解放で自作農になつた喜びと開放感を実感した人々も少なくなる中で、また同じような「負の歴史」を繰り返すのだろうかと思うと情けなくなつてくる時がある。

ある日、父親が杖をなくしたという。その杖は、畑に忘れてきたのだつた。杖をついて畑に行つた父親が、畑で作業をして、戻つてくるときに杖を忘れて歩いて戻つてきたのだとしたら、農業、畑には、人の生命力を高める何かがあるのかもしれない。

ない。

いま、子どもたちと教室で授業することは楽しい。ただひたすら教室で子どもたちと授業、だけしていたいと思うときがある。田んぼや畑で農作業しているときと同じような気分になつてくる。

これまで、農業も教育も「命あるものを育て、その命あるものの潜在的能力を最大限発揮できるように条件を整える」仕事だと思ひ続けてきた。そして、毎年3月の学年末になると、学級編成の作業が始まる。どんなにいい学級になつたとしても、この時期に自分の手で「解体」してしまわなければならない。さらに4月になると新しい学級でゼ口からのスタート。たしかにゼロからではあるが、3月の到達点から考えるとマイナスからのスタートのように30代中頃から感じ始めるようになった。その時に、(私はこれから先、ずっと創つてはこわし、創つてはこわしという仕事を何年間もつづけていかなければならないんだなあ。)と思ひ、「きりのなさ」と「むなしさ」を感じた。しかも、新学期は子どもたちとの関係の作り直しの時期で、ほとんどのことがあまりうまくいかないことが多かった。

そう思ひ始めたころ、米作りを始めた。苗作りからご飯まで、できるところは全部自分でやってみようと思つてた。4月。新しい学級での最初の仕事は始業式の翌日の種まきから始まる。1つのくぼみに1粒ずつ子どもたちの手で種をまいていく。発芽し、少しずつ緑色が濃くなつてくる。

子どもの目も私の目も苗に向かっていて。ともにいい苗に育ってほしいと思いつつ観察している。そして、5月下旬の田植えやアイガモの「進水」。農作業を通じて、子どものいい面が分かってくる。こうして新学期のゆううつから逃れられるようになってきた。さらに10月。収穫の目標は「一反当たり10俵以上」なのだ。実際は6俵くらいしかとれない。しかし、1株の稲を比べてみると、プロの農家が育てた稲以上に育っている。授業の中で、このような違いがなぜ出てくるのかを考え、その後に脱穀や粃すり、精米をしてご飯にして食べるまでやる。そうすると、目標にしていた量はとれなくても、子どもの学習の様子で励まされる。4月には稲に助けられ、10月には子どもに助けられる。その時に、どんなに素晴らしい稲でも刈って食べなければそのすばらしさはわからないことに気づき、自分自身の中にあつた「きりのなさ」を乗り越えることができた。

また、学習会に参加するなかで、同じ教科のさまざまな単元で優れた実践を毎年のように報告されている先輩の先生方に出会うこともできた。しかし、私の力量からすると、毎年毎年違う単元で実践記録を書けるほど力量がないことも実感していた。今年やっていることが、来年違う学年を担任するといけないことがいくつもある。別の意味での「きりのなさ」も感じていた。そのようなときに、内山節氏の「子どもたちの時間」(岩波書店)を読み、農的な時間の循環の概念を知ることがで

きた。農家は、毎年米作りを続ける中で、春夏秋冬とその作物に合わせた時間の循環の中で暮らしている。とすると、毎年毎年違うことに取り組む「教育実践」とは別な仕事の仕方もあるのではないかと考え始めた。米作りの仕事の始まりと学校の新学期の始まりは重なることも多い。そして、カリキュラム上は直線的に流れていく「時間」も、子どもの暮らしの面から見ると「循環」していることもたくさんあるように思えてきた。米を中心に授業を組み立てていくことで、私自身の暮らしや生き方がその場限りの一方通行ではない「循環」するものに変わっていくのではないかと考えると、「きりのなさ」を乗り越えることができるきっかけにもなるのではないかと思つた。物のリサイクルだけでなく、時間や空間も「循環」させることこそが、より重要なのではないかと考えるようになった。残りの数年間、教育と農業の共通点を考えながら、子どもたちと良い時間を過ごしていきたいと考えている。

最後に、震災を通して考えたことを振り返って、結びとしたい。

□ 2011年3月11日以後

(自分の震災の記録より)

今回の震災の個別具体的な事実、話はたくさん聞いた。しかし、何が分かつたら震災が分かつたことになるのか、ずっと疑問だった。私がたどり着いた結論は「自然が不自然を壊し、不自然が自然を壊した」だった。また「復

興」にしても、それぞれの家庭が家を失つても、それを建て直すだけの蓄えがあれば自力で復興できたのだ。それができないような社会を作つて、今度は「復興予算」に制限を加えるというのは人災そのものではない。自然災害は、ある意味で仕方がない面もある。しかし、「人災」は学べば防げることが多い。

今「新しい東アジアの近現代史」という本をテキストに学習会をしている。講師は、1931年9月18日の満州事変の始まりの日に奉天において、大砲の弾が頭上を跳んでいく音に腰を抜かした祖母のことが「一番最初の記憶」になっている先生である。その本を読んでいると、「条約改正」の過程から、不平等条約を結んだつけが何十年にも影響するを思い知らされる。やっとなに入れた「関税自主権」や「治外法権」が100年たつて、「TPP」ですつかり失つてしまつてはないかと心配になってくる。社会的経済的な「災害」をしつかり自覚できる力をつけるのも広い意味での「防災」だと思つた。「安全・安心」のためにどうしたらいいのか、社会のデザインをもう一度考え直す時期なのかもしれない。

(大崎市立鹿島台小学校)

ぼくの新任研

— 惟也先生との出会い —

高橋 研 一

1、新任研の始まり

大学を卒業したばかりの一九八七年四月、角田市立角田小学校赴任。私にとって運命的な出会いがあった。三学年担任で学年主任がなんと、あの白川小学校から転任してきたばかりの遠藤惟也先生だったのである。見かけはたのおんつあん(自称たぬき先生)。「すごい人と一緒なんだねえ。」とよく言われた。学生時代に自川小での実践を数回ビデオで見たことがあるだけで、正直、名前を知らないでいた。しかし、そこから惟也先生の実践のすばらしさ、深さ、豊かさ、教師として、そして人間としての生き様を垣間見るようになったわけである。かくして「ぼくの新任研」が始まった。

んつける、意に沿わないと「つまんねえ。」とわめく。順番で、代わり番こんなか知らない子がわんさか。けんかは常。それも、思い切りかみついたり、顔にパンチを飛ばしたり、髪の毛が無くなるのではないかと思うくらいに引っぱたりという様だった。本格的な闘いの始まりだった。

当然、新任の自分にはそんな子どもたちを落着かせる術なんかない。若さだけでは武器に限界がある。私の怒鳴り声も空回りするだけだった。疲れるだけの毎日。どうしたらいいのかわかんなくて考えることができないでいた。しかし、我がクラスだけではなく他の三クラスも同様な状況だった。ここから、惟也先生らしいやり方の始まりだった。

今、手元に「第二回学年会三学年」というレジュメがある。「いかにし『ウルトラチョロ急三年』を高めていったらよいか」という提案だった。子どもたちの事実の分析、具体的指導の方針が書かれている。教師の指導権(信頼)を確立すること。子どもに自治能力を育てること。学ぶことの大好きな『ウルトラチョロ急』にするにはどうするか。

何で勝負するのか。(これは口癖だった。)確かな学力を身につけさせるための『二〇〇日大作戦』等々。こんな事も書いてあった。「朝の運動をがっちりやって、エネルギーの半分を消費させよう。」私自身ここがとても気に入っているところである。さらに「十分に話し合って納得したら、実行します。」と書き加えてある。それからは惟也先生の実践をより具体的に学ぶ(真似ぶ)ことになる。

2、子どもと共に歩む姿から

初めに子どもたちとの接し方、関係の作り方である。登校してくると「おはよう。」と今日もがんばろうの握手、「さようなら。」もまた握手。あのがっちりとした手に握られ、包まれながら子どもたちは安心感・信頼感を得ていたものと思う。次々に寄ってくる。うらやましかった。子どもたちがなかなか話を聞こうとしない。すると、突然ハンカチを上に向かってポーンと投げ拍手をさせる。繰り返しに拍手の音が大きく響くようになる。そして、投げる真似をする。集中していない子はだまされて拍手。笑い。でも、いつのまにか子どもたちはみんな話を聞く姿勢になっっている。「はい！ 集中。一、二、三」と木槌をたたく。育ってくる。「はいっ！」だけで子どもたちの顔は惟也先生の方を向くようになる。こうした遊び心を生かした技もいっぱい見せてもらった。また、自分がリーダーとなってよく遊び、自らアコーディオンを弾き歌っていた。

次に、自治能力の育て方を学んだ。「チャイムが

なったら三分いないに席につこう。」こんな提案を
惟也先生が行った。話し合いの議長は担任。こう
したためてに対する取り組み、点検は初めのうち
は教師主導で行っていたのだが、徐々に子どもた
ち自身が学級会への提案を行い、点検するという
形に変わっていった。めあて達成が続くと「達成
お祝い会」というようなことも行っていた。その他、
学級みんなで行いたいこと、暴力・悪口の問題な
ど学級会への提案の数は年間で百を超えていたよ
うである。「自分たちで決めたことはやり切る。守
り切る。」とよく聞かされた。私自身はうまくいか
ないことの連続だったが、そうした取り組みを少
しずつ真似しながら子どもたちが育ってきたよう
に感じていた。

三つ目は、表現活動。白川小での実践はあまり
に有名であるが、子どもたちの力をどう引き出し、
高めていくのかそんな技も学ばせてもらった。ま
ずは、運動会の「荒馬」である。あの「チョロ急」
連中にはもってこいの演技だった。夏休み中に、
宮教大・中森研の浅川氏に角田小まで来ていたた
き講習会。私自身もこの手の踊りが好きだったの
で、楽しんで指導ができた。惟也先生が大鼓を叩
きながら「ラッセラー、……」と大きな体育館に
響き渡る声を出す。私も負けじと跳ねる。だれが
見ても名コンビだった。いつしか子どもたちは引
き込まれ「こんめい（小さな）荒馬」に進化して
いた。運動会当日は子どもだけではない、保護者

の笑顔もよかった。

もう一つ、表現活動。学習発表会で行ったオ
ペレッタ「かさこじぞう」。これも忘れられない。
一七〇人近い人数でやるオペレッタ。ほとんどの
子が合唱隊に回るわけだが、一曲一曲の歌がいい。
エネルギーたっぷりの子どもたちは歌の世界に引
き込まれ、いい表情で歌う。子どもたちが本気に
なつて取り組むためにはネタ（題材）が重要。こ
んなことも実感した。学年一番の暴れ者とお散歩
虫（うろちよろ）がダブルキャストでじいさま役
演技中じつとして六地蔵の役はチョロ連中。
練習中、惟也先生から一つ一つの動き、台詞にコ
メントが入る。しかし、「こうしなさい」的な指導
はない。簡単な身振りと言葉による働きかけで子
どもたちの演技がどんどん変わっていく。もちろ
ん、独唱も全体の歌声も。その気にさせ、力を最
大限に引き出す。これが指導なんだなあと思った。
学年が一つとなつて行った演技に保護者、前担任
は涙、涙……。あの子たちも、もう二八才。

惟也先生を中心とした教師集団のチームワーク
が最高だったことは言うまでもない。

もう一つ、忘れてならないのが授業である。
「子どもたちは学校に七〜八時間いるけど、その
うち四〜五時間が授業を受けて勉強している。そ
の授業をきちんとやらないで、子どもたちと何で
勝負するのか。」

こんな話をよくしてもらった。学ぶことによつ
て人が人らしく育っていく。死刑囚―島秋人の話

おみやげは何にしようかな

佐藤 正 夫

私が初めて一年生を持ったのは、もう二十年
ほど前になりますが、今もあの子どもたちか
らの教えを守っているつもりです。

入学式の次の日から、子どもたちは、とにか
くいろいろな物を持ってきました。タンポポだつ
たり、アメンボだつたり、ただの石ころだつたり。
朝や帰りの道々、そこに立ち止まって対話して
いる姿が目には浮かびました。ザリガニや、五円玉
時にはサクランボだつたり。そのうち私は気付
きました。どの子も私に見せたくて、話を聞い
てほしくて毎日毎日持つてくることを。

朝は、持ち込まれたものの話をみんなで聞く
ことが日課となつていきました。拾つたり摘ん
だりしたものは、子どもからの贈り物なんだと
思うようになりました。それは私にとつてほん
とに嬉しいことでした。

ある時、ぐじゃあ、おれも何かおみやげ持つ
ていこう。」と考え、『り』の字のためにリング
を持つていったんです。

たった一個だったのに、とつても喜んで『り』
の字を書いたのです。それからというものが、必
ずおみやげを持つていくことを心がけました。
自作のプリントだつたり、学級通信だつたり、
イナゴの佃煮だつたり。そういうものを準備し

なんかもよく聞いた。

私自身、特に一学期は授業が成立しないことが常で、子どもが集中する授業をどう作るかが大きな課題だった。五月、初めて学年の先生方に授業を見てもらった。説明文の学習だった。抜け出せない迷路にはまり込んだような授業になり、子どもの前から逃げ出したくなってしまった。

でも、その後の学年会では惟也先生を中心に丁寧に検討、具体的に助言をもらった。ここでも、私のやる気を引き出してくれた。そして、お願いしなくても授業をよく見に来てくれた。困っている、今はそんなことしないでどううけどー「介入授業」をしてくれた。これまた、自分にとって経験しがたい学びとなった。

授業もよく見せてもらった。目から鱗が落ちた。ともいう表現をしたらいいのだろうか。初めて見た国語の授業は、衝撃的だった。子どもたちの授業に取り組む目。音読、発言の声。びんと伸びきった挙手の手。どれをとっても「すごい」という言葉しか浮かばなかった。子どもたちに投げかける指示や発問。さらに思考を揺さぶるような問いかけ。「君・君・君がいいっ！ すごい！」と音読や発言に対する間髪入れぬ評価。当然、初めて見た。こうして、子どもたちのやる気を引き出すと共に、学習集団としての力を高めていく過程を学んだ。もちろん、日々の授業に対する教材研究、準備にも余念がなかった。時間を上手に使っては自分のノートに翌日の授業案を書いていった。教材研

究をしていなかったら、準備をしていなかったら授業をしない。それくらい授業にかける意気込みは違っていた。

こうした学びを得つつ、我がクラスの「チヨロ急」連中も高まりが見られてきた。

角田小二、三年目は教務主任となつてしまったがいろいろな教室に入つてはよく授業を見せてくれた。なかでも、五年生で行った「靴下」（室生犀星）の授業は今でも忘れられない。

3、終わりに

今考えてみればなんと賛沢な「ぼくの新任研」だったのかと思う。貴重な出会い、研修だった。本当に幸せ者だったと思う。

他にも惟也先生のことを話したらきりがない。思い悩んでいるとやさしく声をかけてくれたり、学習会やサークルに誘ってくれたり、本を紹介してくれたら、山歩きや温泉に誘ってくれたり、結婚相談に乗ってもらったり、一緒に遊び歩いたり……。日曜日なんかもずうずうしく同僚と自宅に押しかけ教材分析につきあつてもらったり、ビデオを見ながら授業の検討をしてもらったりもした。まだまだ足元にも及ばないが、学ばせてもらったこととその価値は計り知れない。

(白石・福岡小学校)

*「カマラード」39号(2006年7月)より転載

ているときは、これで喜ぶかなあ、びっくりした顔するかなあ、と学級の子どものことが浮かんできました。

そして朝、教室に入るときは、どきどきしたのです。

何でも新鮮で、何でも面白がってくれる一年生。だから、私のおみやげ探しはちっとも苦痛ではなく、むしろ楽しみなものになっていきました。そうやって私は、『先生』として最も基本的な準備と面白さを育てられたのだと思います。つまり、明日が楽しみになるようなもの(教材やそれに付随するもの)を持たずに行つても、お互いつまらないだけだと教えられたのです。

つい最近のおみやげは何かというところ、『スーホの白い馬』の授業案でした。読み足りなかつたことを含んで、毎日の授業案を考えるのはなかなか大変なことではあります。緊張しながら教室に入りました。最後の時間、日が「大好きな馬じゃなかったら馬頭琴で言わないさ。だって、いい音にならないもん。」と言つてみんなをびっくりさせました。こんな発言を生む授業になったのも、あの一年生が教えてくれた『先生へのおくりもの』があったからなのです。

このように、子どもと気持ちを通い合わせる営みは、どんな権力をもってしても否定できないだろうし、それが私の仕事だと思っています。

(東六小)

*『教育文化』481号(2007年4月)より転載

教師の一分

「あしたはてんきだ」と子どもたち ―2年―

高橋 洋子

一、はじめに

四月に新しく担任する子どもたちと出会うたびに、「この子たちに確かな学力と自立の力を」という決意を新たにする。

昨年四月転動してすぐに出会った四〇人の子どもたちについても同じだった。しかし、障害をもつ一人の子に手をやき、髪を振り乱している担任を前にして、どの子もじつと耐えていたことに一学期中、気が付かなかった。夏休みに入り、ようやく一息つくと、「二学期、私はあの子たちに何をしよう」という反省ばかり沸いてきた。友だちとの関わりを求め、休み時間、授業時間の区別なく教室の内外を駆け回るK。一時間に四回も五回もトイレにかけるA。算数になるとつぶらな瞳を大きく見開いたまま困っているY。頑なにことばを発することのないS。突然、「私は学校に行かないことにする」と宣言し、一週間も休んだT。どの子も勉強したい、友だちをたくさん作りたいと



いう希望をもって入学してきたはずだ。考えれば考えるほど、授業らしい授業をしてこなかった担任の責任を感じた。

「よい教材で、どの子にも分かる授業をすること子どもを育てる」という原点に立って、一人一人の課題を考えたいと思った。

その初めが「大きなかぶ」であった。常々、文学作品は、文で人間の本質、人間世界の本質を描いているから、人間関係を作ることが不得手な現代の子どもたちには、優れた作品を通して間接的

に様々な人間に出会わせたいと思っている。「大きなかぶ」もみんなの力を合わせて大事を成し遂げるという子どもたちが大好きなお話であるが、絵本の絵では、文には書いていない「一人一人がどうしたらかぶをぬくことができるかを考えながら行動している」ことが想像できる。文を手掛かりに形象を描く前段階として、絵をたっぷり楽しむと考え、絵本を用いて授業した。「絵から文へ」「文から絵へ」、子どもたちは作品の世界を楽しみ、文も意識して読むようになった。

二年の一学期には、レオ・レオ二作「スイミー」を絵本の拡大した絵を補助教材として用い、授業した。絵と文が一つとなつて作品を作っている。美しい絵と賢く行動的なスイミーの姿が、集団で行動する楽しさを分かり始めていたこの時期の子どもたちをひきつけた。

これらの実践を通して文学作品の授業をするうえで大事なことは教材（今、この子たちと何を）そして授業（作品の全面理解を目指しての手立て）ということだということを改めて痛感した。

そんなとき、秋の仙教組教研能力発達分科会で授業提案をすることになった。今度は、絵を頼ることなく、文を手掛かりに、人間の姿を考える授業をしたいと考え、「あしたはてんきだ」（おかもとよしお作）を取り上げることにした。身近すぎるためにお互いの良さが分かりにくい「兄弟の姿」を学ぶことで、兄弟・あるいは身近な友だちを理解するきっかけになつてほしいという願いを込め

て……。

六月から毎週木曜日、能力発達分科会推進委員を中心しに常時七、八人が集まり、国語サークルの春日先生にも入っていただいて、教材分析、指導案作りなど勉強してきた。

そのような経過で迎えた十月の研究授業を中心とした記録である。

二、作品について

「あしたはてんきだ。」(下掲)は、いちろうにいさんとふじお君の関係を表現しているだろう。

大きな事件がある訳でもなく、ある日の一日を舞台として、兄と弟の関係を描いている。いつの時代でも、兄弟の間によくある出来事だ。現代の子どもにとってこの作品の時代背景は難しいが、そこをこえて、「兄弟っていいものだ。」ということとを、子どもたちに伝えてくれることだろう。

〈主題〉

仲のよい兄と弟が、空もようが悪くなったことで、気持ちがすれちがう。しかし兄のために「あしたはてんきにしておくれ。」と懸命に願う弟の心が伝わり、今までよりもっと仲良くなるお話。

〈理想〉

お互いの心を理解し合いながら兄弟は育っていく。

三、授業をどのように進めたか

(1) 形象を豊かにイメージ(絵と感情)化するために

① 動作化

いちろうにいさんは、げたを、ポーンとけりあげました。

「このようにしたのかな。」と言って、子どもたちの前で、げたを軽く蹴って見せた。げたは軽くなる。子どもたちは「違う、違う。」と言って立ち上がり、文にそって口々に言った。

② 音読

「あめかてんきか」

音読から読みへ、読みから音読へ。

③ 一般的意味から文脈の読みへ

「おや、これは……」
えんがわのひさしに、もうちゃんとて
るてるぼうずがぶらさがっているのです。

ゆうき「おや、これは「いちろうにいさんは、
T うまいね。もう一度言ってみて。」

あしたはてんきだ

おかもとよしお

「あめかてんきか。」
いちろうにいさんは、げたをポーンとけりあげました。げたはうらがえつておちました。
「やあい、にいちゃん。あしたはあめだよ。」
おとうこのふじおくんが、おもしろそうに手をたたいて、
「あめあめ、ふれふれ、にいちゃん、あしたのえんそく、だめらしい……。」と、うたいました。
「やい、こいっ。」
いちろうにいさんは、いそいでげたをはいておひかきました。
けねももう、ふじおくんは、とおくのほうまへにけいていへ、
「ピピピチ、チャップチャップ、ランランラッ。」
と、「ピピピ」わらわっているのです。
「かえっ、」けねのがはやくいっし。
いちろうにいさんもわらいながら、おいかけのをやめました。
あしたはいちろうにいさんたちのえんそくです。でも、おとうこのふじおくんのえんそくはもうこのあいだすみませした。
「だから、うらやましいんだ。それで、あんなに、からかっているんだ。」
と、いちろうにいさんはかんがえました。
と、うらがたになら、てんきがほんのうらめしくなりました。くもが空いっぱい、びらがうらめしくなりました。
「ふじおが、あんなうたをうたっていたからだ。」
いちろうにいさんは、おとうこにうたいました。
「ちがうよ、ちがうよ。」



ゆうき「おや、これは」
さえこ「おや、これは」

T「おや」と言つのはどんなとき、使うの。
なるみ びっくりした時。

ようすけ 突然何かが起こった時。
さえこ ようすけくんと同じように……

えり 不思議な事件が起こった時。
あやの いつのまにか。

みゆき なかったものがあつた時。
T そういうときも「おや」なんだけどね。いちろう

にいさん、こう言つたんでしょ。そういうふう
びっくりしたり、不思議なときに使う「おや」を使
ただけど、さえこちゃんやゆうきくんの言つたよ

うに読んでみて。

C (読む)「おや、これは」

T いちろうにいさん、どうしてそんなにびっくりし
たの？

ともか まだ自分がやっていないのに、てるてるぼう
ずがぶら下がっていたから。
あい 誰もてるてるぼうずを作っていないと思つてい

たのに、雨戸を開けたら、いきなりてるてるぼうず
がぶら下がっていたから。

しおり 縁側のひざしにもうちゃんとてるてるぼうず
がぶら下がっていたのです。

C てるてるぼうずがいつの間にかぶら下がっていた
から。

C なにもしていないのに、てるてるぼうずがぶら下
がっていたから。

④ 発問と板書(切り返し)の発問も含めて)

子どもの思考の方向を明確にする発問や考えを
焦点化するための板書。

空を見上げると、ゆうがたあつたくもは、
すっかりなくなつて、ほしがたくさんで
ています。

T 見上げたでしょ。お空は夕方の空と同じでしたか。
せいや ちがう。

C ちがう。

れん 夕方とちがつて、空にはたくさん星が出ていた。
ゆうた 付け足し。夕方あつた雲はすっかりなくなつ

て。
ほなみ 夕方あつた雨が降りそうな雲はなくなつた

の。
けいすけ 夕方の真つ黒な雲が消えてピカピカの星が

出た。

T なるほど、お星さま。(二つ提示)
C ほう。
T いい、これで。

ふじおくんは、なまそつなかおになりまし
た。

それから、ばつこはんがすんで、八じにな
ると、ふたりはいつしよにねだこにはいりま
した。けれど、いちろうにいさんは、なか

なかねむれませぬ。

「ああ、そつだ。」
いちろうにいさんは、びゅうこりおきあが
りました。

「てるてるぼうずをつくつておいじ。」
いちろうにいさんは、そつとねんをぬけ

だして、へんきゆうへんのとこへ入いきま
した。

ちやうや、おつひのうへへのひきだして、
いろがみがありました。

「まいもつひ。」
いちろうにいさんは、ねむつてゐるふじお

くんのほうにむかつていいながら、てるてる
ぼうずをつくりました。

そして、えんがわのあまごをそつとあけた
ときでした。

「おや、これは……。」
えんがわのひさしに、もつちやんと、てる

てるぼうずがなびらながつてゐるのです。

てるてるぼうずのものには、
「あした、てんきにておくれ。」
と、かいてありました。

「ふじおがつくつてくれたんだ。」
空を見上げると、ゆうがたあつたくもは、

すっかりなくなつて、ほしがたくさんでてい
ます。

「あしたはてんきだ。」
いちろうにいさんは、うれしくつていふや

まました。

たむら だめ、たくさん出ています。

T (二つ出して) これでいい？

C だめ！

T (子どもの声に合わせて、星を九個出す)

C もっと出して。

このとき、教室の中の全ての視線は、黒板にあった。

⑤ 場面(1)の絵を書く(略)

(2) 読み重ねるといこと

文は、単独で存在しているのではない。みんな教材研究をしていると、文の配列(作品の構成というべきか)の見事さについても感嘆してしまふ。だから、文を単独に読むのではなくて、文脈の中で、前の文、前の段落、前の場面と関係付けて読む習慣をつけたものだと思ふ。

けれども、いちろうにいさんは、なかなかねむれません。

T ねどこに入って、いちろうにいさんはすぐに眠れましたか。

C 眠れない。

C 眠れない。だって、心配。

C けれども、いちろうにいさんは、なかなかねむれません。

T 「なかなかねむれません」というのは、眠ろうとするんだけど、眠れないということ。目をつぶるんだ

けど。どうして、いちろうにいさんは眠れないの。

C あしたは遠足。

C 天気が気になって。

なつみ ああ雲がもともっとひどくなつて、もう雨降っているかもしれない。

C 雨が降つたら、あしたの遠足はだめだなあ。

C あしたは雨降るかもしれないと思つて眠れなかった。

C あしたの遠足中止かな。

C いちろうにいさんたちの楽しい遠足がだめになつちゃうと

C いやだ。

C あしたの天気が心配だから、眠れない。

T そうだね。だって、最後に見たときの空はどんな空だったの。

C 空いっぱい雲が広がっていた。

C 今にも雨が降りそうな黒い雲。

T そういう雲が空いっぱいなのを見て寝たんでしょ。だから、あの後雲はどうなったかなと心配で眠ろうとしてもなかなか眠れなかった。

(3) 場面と場面をつないで考える

二次読み(ということばが適当かどうか分からないが)の中心は、三の場面に全く登場していないふじおくんのをつきり描くことだと考えた。それは、子どもたちの「どうしてふじおくんが作ったのだろう」「いつ作ったのだろう」という疑問を解決する形で進めることができた。

(4) 主題を考える

T ところで、二人はどんな兄弟ですか。

C 本当は仲のいい兄弟。

あやの けんかもしっぱいするけれど、仲のよい兄弟ともか 気の合う兄弟。

たむら 仲のよい兄弟だけど、時々からかったりする。

けいすけ けんかするほど、仲のよい兄弟。

C けんかするけど、すぐなかなおりする。

四、授業を終えて

一時間ごとの授業記録をみると、いつものことだが「なんとむだの多い授業をしていることか」と思う。文にないことを聞いたり、発問が不明確だったり、子どもの発言にひきずられたり、理由は様々だが、授業が一つの形象に向かつて真つすぐに進んだら、みんなで学び、作り上げる楽しさをもっと大きかつたろう。そのような悔いは数限りなくあつたが、今までの私の授業にはなかつたことを学んだ。

それは、子どもたちがよく考え、よく授業に参加したということである。

外えは、M子。ほとんど学習に興味を持たず、「おつきあい」の学習はしない。その彼女が、「あしたはてんきだ」では、よく手を挙げ発言した。直接、文の読み取りには関係なく、「そういうことってあるよ。うちのお兄ちゃんね……」というふうなものであつたが。

研究授業の前日の夕方、その日も授業を見に来

てくれた春日先生が偶然校門近くで声をかけられたという。「春日先生、今日どうして私手を挙げなかったか分かる？」「ほう、どうしてや」「私ね、喉がいたかったんだよ。だから、手を挙げられなかったの」「じゃあ、明日は大丈夫だな」「……」といういきさつを、夜、春日先生は電話をくれた。

私は手を挙げること自体「たまたま」と思っていたから、その日手を挙げたかどうか記憶になかった。でも、1/40でしかなく教師の頭の片隅にさえ残っていない子でも、「手を挙げなかった」ことをこのように気にしていたのだった。教師である私は「あの子に手を挙げさせられなかった」という反省など全くしていなかったのに。春日先生に無言で約束しなかったが、翌日、内容はともかくとして、よく手を挙げた。

ほかの子どもたちもよく考え、後半は、自ら問いを出し、その問いをみんな考えていく授業となった。

子どもたちの問いはたくさんあった。

・「あしたでんきにしておくれ」にどうして「」がついているの。

・「いいながらつくりました。」はどういう様子だろう。

・「つくっておくつ」はどうして「つくろう」でないの。

・「いちろうにいさんのてるるぼうずはどうなっているの。」

・「いつ、なにでおくじおくんはつくったのだろう。」

・「いちろうにいさんが縁側の所に行く前から星空だったのかな。」

一次読みのあと、場面と場面をつないで考えることが必要となった授業は、初めてだった。今までは二次読みというのは無理に教師が作りだし、子どもの「勉強は終わったのにどうして……」という、面倒臭そうな雰囲気の中で、ごり押ししていた。しかし、今回は授業が次の授業を必要としていった。



では、何が子どもたちをどのように揺り動かし、自ら考えるということをさせたのだろうか。一つには、「あしたはでんきだ」が教材として優れていたこと。二つには主題を意識しながら、一つ一つの場面の読み取りを進めたこと。

三つ目には、その場面を、文を手掛かりとして、具体的な絵と感情としていったことの積み重ねであろう。分かったことが新しいことへの疑問になっていたのだ。そして、一人の疑問をみんなで考える楽しさが教室の中にあつたように思う。そんな中で、教師はいつも読みを試されるといふ場面に立たされていたのだが、それでもなんとか授業を成立させることができたのは「教材を読み取る」「授業案を作る」段階での集団の力があつたからだ。一人ではなく集団で読んだことがより正しく、より豊かな読み取りにしていけたし、授業案を主観的でない科学的なものにしていった。改めて、共に勉強する仲間を持つことの大事さを感じた。

それは、子どもの学習でも同じだろう。一斉学習という、みんなで一つのことを追求する活動の中で、分かる、楽しさ、おもしろさがある。学校というみんなが集まった中で学ぶ意味がそこにあるのだ。授業の中で、子どもたちは対等だった。素直だった。友だちを認め合った。この作品の授業を通して二年一組が得たものは大きい。

(仙台市立長町小学校)

*「カマラード」26号(2000年1月)より転載

わが姿の点描

横沢文質

○菊池讓氏の授業

昭和四年六月頃だつたらうか。八幡町添いにあつた宮城女子師範附属小学校で国語教育研究会があり、菊池讓氏は読方、本郷兵一氏は綴方の授業と研究発表を行った。

菊池氏の授業振りは、氏一流の相互学習と言おうか、自発学習と言おうか活気溢れる学習の展開であつた。第一次の通読が終ると、語句の質疑が始まる。誰かが自分の考えを述べると反論が出る。それが単なる辞書の解明でなく、卒直な生活体験に基づく解釈であり、何より文意に即した発表であつた。教師の考えを子供に押しつけるのではなく、比較して合意点を示唆し、文章と関連させて納得させるやり方で、教師自身の多弁を避け子供主体で解説させる進め方であつた。県下教員の自主的研究団体の初等教育学会を主宰して

いた県視学の菊地勝之助氏は、講評の中で、菊池訓導の授業は、最も進歩的な方法で、今、望まれている好ましい自発的な学習であると絶賛した。満堂を埋めた参観人も共鳴の顔を輝かせ、菊池訓導の卓越した授業のあざやかさを確認した。

私はお宅にも出入りして愛顧を受けていたが、この時ほど偉大な実践者として心から尊敬の念を覚えたことはなかった。

○にし・上杉学習新聞のことなど

私が遠田郡練牛校より、上杉山通小に転動したのは、大正十三年の三月であつたが、その頃「にし」はすでに十号位出ていたのではなかつたらうか。首席訓導は、木町小で童謡教育に情熱をもやし、すでに著書もあつた黒田正氏であり、氏とともにおてんとさん社の仲間であり、仙台児童倶楽部の同人

であつた伊藤博氏や、安倍宏規が同校におつて、「にし」の編集に当り、作品を発表していた。外に天江富弥、スズキヘキ、刈田仁、館内勇の各氏も誌面を飾っていた。

私は地方にいる頃、天江さんたちの仲間であつた相沢太玄氏（太陽幼稚園初代園長）と親交を持ち、童謡童話に興味をもつていたので、上杉に来るなり、早速童話を物にして、続けざまに「にし」に載せてもらった。刈田仁氏からは、ヒューマンティックな君の作品は、それなりに特色があるから、そのままの線で伸ばしていくようにとはげま

しを受けた。「にし」に対する強い愛着を持ちながらも、当時の教育思潮の影響もあつて、子どもの学習全般の向上に役立つものにすべきだという考え方が高まり、「にし」を廃刊して、「上杉学習新聞」を刊行することにした。従来の芸術本

位の同人誌的のものから、子どものための学習新聞に変容させ、科学的な読みものなどを入れたりした。

子どもの作品も童詩優位から綴方本位にかえたようであつた。

いつか私が編集の中心者になつて、冬休み前、終業式に間に合わせようと

して、甲子舎という印刷屋で、小さな火鉢で暖をとりながら、徹夜で校正したこともあつた。伊藤博氏や安倍宏規が他校に去つたあとは、佐々木敏正氏や小川則光氏の協力を得て刊行を続けた。昭和十年四月、私が宮城県女子師範附属小に転じた後は、佐々木敏正氏、小川則光氏それにこの道のベテラン栗山正氏や梅祐男氏がこれに当り充実した学習新聞になった。

○国語土曜会

昭和六年頃、「国語土曜会」と名づけた小集會が持たれた。鈴木道太氏の同級生が中心となつた十五、六人の集まりで、木俣修氏を指導者に迎えた。佐々木正、五十嵐勝治、平間初男、佐人木敏正、氏家芳治、高橋大虎、菅野門之助、鎌田孝などが、特に熱弁を振るつた。鈴木道太氏は、頃合いを見て冴えた意

見を出し傾聴させた。

私は、年長者として別格扱いされ、専ら聴き手役・世話係の役にまわった。はじめ子供の文集を材料にしたが、後には、読方の教材を課題にして話し合った。総体的には、一段高い研究の対象は、文学と教育であった。指導者の木俣修氏は歌人であり、学者であり教育者であったから、氏の講評を兼ねた講話は、まことに傾聴に価する重さを感じさせるものがあつた。

青春の血の気の多い連中とて、政岡屋だけでの話し合いで物足らず、三々五々街頭に進出したようであつたが、私は家族持ちというので放免してもらつた。

左翼の会合と間違われて、木俣氏へ特高からの注意があつたとかで、五、六回で会合は中止した。

○国語日曜会

昭和七年、国語土曜会後しばらく会合を休んだが、その間に、上杉山通小学校を会場にして同志の集會を持った。常連の外に栗原郡の真山から曾根護、三本木の藤田真、涌谷から菅原立男、それに仙台の栗山正なども加わつた。

国語土曜会を、国語日曜会とし

て復活しようではないかとの話が持ち上がり、上杉山通りにあつた会館「文化講座」を、上杉山通小訓導であつた私の口から、文化講座の留守番であつた牛沢三郎氏に依頼して借用、土曜会より、更にメンバーをふやして月一回会合を持つことになつた。

鈴木道太氏が中心となり、佐々木正平間初男、五十嵐勝治、菅野門之助、鎌田孝、藤田真、松野省三、佐藤鶴太郎など特に活躍した。

これには、菊池讓氏も時折出席して激励と指導をされた。鳥取から峯地光重氏がわざわざやつて来て論戦に加わつたこともあつた。

この時は私の家に誘つて一夜を語り合つた。

国語日曜会は、いろいろな高度の研究、国語教育団体を生んで行つた。

○広瀬小学校綴方研究会

昭和九年十一月四日、広瀬小学校で開催されたこの会は、本県綴方教育にとつて、忘れることの出来ない行事であつた。

本県の第一線に立つ国語人四十余人と、北日本を代表し、全国的に声名を馳せている国語人、国分一太郎（山形）、

木下龍二（福島）、佐々木昂、加藤周四郎（秋田）の豪華な顔を揃えての研究會である。

この前夜（三日）に、紅屋喫茶店を会場として、前記北日本の国語人に、宮城からは、菊池讓、横沢文質、鈴木道太、佐々木正、菅野門之助（石森）等が出席、鈴木道太氏の司会で、火の出るような論戦の末、「北日本国語連盟」が結成された。

「ジャーナリズムの商業性を、指導性あるものたらしめるための生活の建設」を情熱的に説く加藤周四郎氏や、「北方の独自性に立つ作品活動をする事によつて、はじめて全日本の綴方文化の正常な発展に寄与することが出来る」われわれはいつでも、北方的な文化に於てのみ、日本の文化運動に貢献することが出来る」と力説する国分一太郎氏をはじめ、木下龍二、佐々木昂各氏からも鋭い論陣が張られ、菊池讓氏のまとめで結成に漕ぎつけた。この時点で、明日広瀬で行われる綴方研究会の指導を堅く依頼して散會した。

研究会当日は、第一校時は本校の公開授業「尋二記述指導（及川武）、尋三書き直し作業（庄子とくゑ）、尋五文話（菅野門之助）、高一詩の指導（沢畑正

一）。特に、木下・国分・佐々木・加藤の各氏は、各々の教室を分担して參觀された。第二校時からは、午前中研究発表―司会は鈴木道太、発表者はいずれも県内の現場教師。氏家芳治（記述指導のメモ）、鎌田冬二（書き直し指導若干の考察）、佐々木正（綴方における題材の問題）、佐藤みさ江（低学年童詩指導の報告）、菅野門之助（文話の在り方）、沢畑正一（生活詩の指導）、五十嵐勝治（文集製作意図と文の採集方向）。

午後からは座談会―まず課題指名―この学校でよい所と直したい所（源新治、菅原立男、小林武、高橋健十郎、佐藤みさ江各氏）。続いて、綴方系統案について。（高橋健十郎氏提案―佐々木正、菅野門之助、鈴木道太、鎌田冬二、高橋健十郎の各氏。それに、お客さん格の佐々木、加藤、木下、国分の各氏も加わり、俄然北日本綴方人によつて討論の豪華版が展開された。

続いて、わが県の情勢を語る、木下龍二（福島）―福島県では、実践が問題でなく、知識が問題にされている。羨しいことには、宮城は実に実践に浸透している。今日の研究会に臨んで驚くと共に憂鬱を感じた。どうぞ福島を叩いてほしい。国分一太郎（山形）―

私は昨日峠を越えて来た。峠を越える時山形は低いなと思つた。私達は全国的基準に立つて、一律にしようとするものに立ち向かわねばならぬ。お前の段階に於ては如何にあるべきかといつ

も思わねばならぬ。自分の子供達に即して私は必然に北方性のにしむ作品を、生活を築かねばならぬ事を考え及ぶのだとして、結城哀草果を引例した。加藤周四郎(秋田)―真善美に飛び込み得る心臓を持ったものが、グループに

たつて鍛え合う程美しい事はない。私は東北地方の共通性を発見する。即ち強力な北方性を認識するものなのだ。我々は強く強く結び合おうではないか。そして、北方性の昂揚に―東北全体に強い意欲を持たせることに協力しようではないか。それが北方教育の目標であり祈願である。

三氏の報告が終ると、すつくと立つた人がある。仙南の国語人であり歌人である小林武氏である。国分先生のお話にあつた結城哀草果の件については首肯しかねると強硬に反論した。国分氏は結城氏の実情を弁明して小林氏の理解を懇願するという図もあつた。

続いて、源新治氏(軍旗作文について)と佐藤正人氏(訓導協議会状況)

二氏の報告があるはずになつていたが、源氏は辞退して、佐藤氏のみ行われた。最後に、伊藤啓校長の挨拶があり、充実した感激的な一日を終了した。

作並温泉で歓迎懇談会を持つた後、作並駅より仙台まで、北方国語人と同車したが、ここでは秋田の佐々木昂氏の気焔に圧倒された。子供の詩を繰り返し繰り返し返したい上げ、子供のすばらしさを語り続けた。北方国語人の面目躍如というべきである。

○広瀬の国語人

山すそまで校庭が連なる小規模学校が、県下のすぐれた国語人や、北日本切つての国語人を集めての綴方研究会の会場に選ばれ、実践を披露するまでに認められたのはどうしてであろうか。菅野門之助、沢畑正一、及川武、庄

子とくゑ、寺田はつ、石森綾子それに沢口伝吉。まことに山の学校にふさわしい素朴な生活態度を持つ人々である。それなのに有名な国語人を迎えても、平然として普段通りの態度で授業している。いわば国語人としての心意気を持つて実践を披露している。どの教室も活気があり澁刺としている。

自分の言葉で物を言う。自分のことばで詩を作り、自分の生活を自分の言葉で文章化している。こうした子供たちを育て上げている広瀬小の教師集団は畏敬すべき教育者というべきである。これは若いながら、すでに大活躍している同僚の菅野門之助の影響もあるだろう。また平素親しくしている鈴木道太、佐々木正等のすぐれた国語人の指導や鞭撻も大いに関係があるだろう。然しそれだけではない。藤村の詩を愛

し、「蕃山の紅葉あくがれ来し我そ」と物する歌人で、文学を理解し、国語こそ子供を人間として大きく伸ばす力であるという見識と信念を持つ伊藤校長こそ、国語広瀬を引き上げた功労者と言ふべきである。背が高く、がっしりした堂々たる体躯を持ち、美髪を生やした風貌は、如何にも信頼感が持て魅力的である。

そのうえ、教師の一人一人にメゴイメゴイと慈父のような愛情で接しているのが、教師達もオヤジのように慕っている。したがって、教師と子供の交流もしつくりしてくる。国語広瀬の名を挙げた湧泉はここにあるのではなからうか。

(*)「教育すばる」25号

(85年6月発行)より転載

民権教師の歩いた道

大村 榮

○宮城県の自由民権運動

ことしに入つて、全国各地に「自由

民権運動100年」を記念しようとする動きが起つている。宮城県にも、さきごろ、その実行委員会が充足した。

ところで、宮城県の自由民権運動には、一つの特徴がある。その中心の勢力が、多数の教員によつて構成されて

いたことである。彼らの多くは、士族出身の小学校教師であった。多感な青年期に戊辰の敗戦を経験し、生活の根柢の一切を失ったばかりか、将来への夢をも封じこめられるという状況の中で、彼らは、わずかに開かれていた小

越列藩同盟を組織して政府軍に反逆した罪を問われて明治二年三月に家屋敷没収の上に切腹して果てた若生文十郎の末弟であり、明治八年七月に官立宮城師範学校を卒業（二十八歳三月）し、ただちに宮城県に派遣されている。

される。なお、校地移転に関する学区取締から県庁へ提出した伺書は明治八年九月付になっている。

この鶴鳴社主催の第一回政談演説会が師範学校を会場に開かれるのが同年十一月九日で、その翌月には木町通小学校を会場に毎月第二・第三・第四の土曜日午後一時から四時までの演説並討論会を発足させている。なお、この開催の県への上申書は培根小学校教員・社長若生精一郎を筆頭に白極誠一（副社長・佐藤時彦）（培根小学校幹事）・佐藤郁二郎（同校教員・社員）らの連署で提出された。

この中には、「学制」実施直後から仮教師になったもの、官立宮城師範学校を卒業したもの、この卒業生らが中核となつて創設した伝習学校で教育養成の課程を修めたものなど、さまざま

これまでに伝えられてきたところによると、若生精一郎が仙台の培根小学校三等訓導に就任したのは明治九年四月（木町通小学校沿革誌）による）となつて

さらに、明治十一年六月には「女子取扱方及幼稚園保育法御取調ノ為メ」に矢野成文を上京させ東京幼稚園（東京女子師範学校付設）で約五十日間にわたる研修をさせている。また、この

また、この年十二月、東京女子師範学校が幼稚園保母練習科生徒を募集したのに応じ、木町通小学校からさきの大津・相原の二名の女教師を推薦し、翌一月に上京させて受験にのぞませ、その三月には首尾よく兩名を入学させている。この兩名が卒業して帰仙するのは、明治十三年七月だが、木町通小学校付属幼稚園の開園式は、同十二年六月七日に挙行された。若生精一郎はそれを待たずに退職し、『宮城日報』を主宰して民権運動に専心することとなる。

の中に、多数のハリストス正教（キリスト教の一派、ギリシャ正教ともいう）の信徒が含まれていたことである。このことは、戊辰戦争の末期の函館を舞台に、榎本武揚らの軍に参加しようとして北海道に渡った仙台藩の少壮武士たちが、ロシア領事館付主任司祭ニコライに接して入信し、仙台に帰って布教を展開した成果によるものであった。

あるいは卒業と同時に前身の北六番丁小学校に赴任し、先任の二等権訓導矢野成文（開校当初から勤務）とともに協力して校地を北四番丁に移転し校名を培根小学校と改めたものかと推測

若生精一郎が、福島県の河野広中の呼びかけに応じ、仙台師範学校校長事務弁理箕浦勝人らとはかつて、県内最初の民権政社「鶴鳴社」を組織するのが、明治十一年秋（『河野磐州伝』上）であ

○若生精一郎の授業
矢野顕蔵は矢野成文の長子で、培根小学校在学中に若生精一郎の薫陶を受

ひき、県内はもとより広く東北地方の自由民権運動を推進した指導者のひとり

若生精一郎である。彼は、奥羽

若生精一郎が、福島県の河野広中の呼びかけに応じ、仙台師範学校校長事務弁理箕浦勝人らとはかつて、県内最初の民権政社「鶴鳴社」を組織するのが、明治十一年秋（『河野磐州伝』上）であ

○若生精一郎の授業
矢野顕蔵は矢野成文の長子で、培根小学校在学中に若生精一郎の薫陶を受

けている。つぎに引用するのは、顕蔵

が生前の恩師をしのぐので追悼の一文である。(今泉笛王州編『絶絃集』による)

「余等童子、嘗テ培根小学校二遊フ。

先生、時二其ノ督学タリ。先生、書生ヲ愛シ尤も文を嗜ム、十数童子ノ文ト難ドモ丁寧雌黄(詩文を改める)且ツ誦シ、且ツ批(批正)シ研朱霏々(朱を入れて訂正すること無数)トシテ降ル。載テ之ヲ誦スルニ面目一変、錦繡燦燦、所謂ル瓦ヲ点シ金トナスノ概アリ、是ヲ以テ余等童子、尤モ先生ノ授業ヲ樂ミ、唯其ノ長カラザランヲ恐ル。

一日、先生余等童子ニ命ズルニ『東北人民』テフ文題ヲ以テス。先生亦タ自ラ一文ヲ草シ、之ヲ塗板ニ書シ余等童子ノ為メニ誦ス。其ノ文ニ曰ク『東北人民ハ無氣力ナリ大情物ナリト言ハレシト、滔滔数十言、痛ク東北人士ノ深痛ニシ、言々割切ヲ極ム。先生、朗々一誦之ニ次グニ東北人士ノ天職ヲ以テシ、氣軒リ色肅ミ満腹慷慨ノ氣、余等童子ヲシテ覚エズ柔夷ヲ握リテ起タシメントス。不肖顕蔵、年正サニ而立、万卷ヲ読破シテ天下ヲ周遊スト雖ドモ、其ノ一箴深ク骨髓に徹シ、死スト雖ドモ尚忘ルル能ハザル者、先生當時ノ言コ

レヲ然リトス。

○古川小学校長としての若生精一郎

明治十三年に入つて「鶴鳴社」は、広く全国民権政社との連携を強化する方針のもとに「本立社」を組織し、「国会設立敷願ノ旨意」の檄文を東北各地の民権政社に発して運動の結集をはかった。そして、同年三月には大阪で開催された愛国社第四大会(国会期成同盟第一回大会)に「本立社」から村松亀一郎を参加(請願署名一五六名)させた。さらに、同年十二月に国会期成同盟第二回大会が東京に開かれると、「本立社」社長若生精一郎は宮城県各郡有志二三〇名の署名を持参して参加し、その翌月には「国会開設哀願書」の提出を企てている。しかし、こうした運動の高まりも、さきに政府の「集会条例」(明治十三年四月制定)や、その後の改正(同年十二月)によつてきびしく制限され弾圧されるに至つた。

若生精一郎が、古川小学校長として教職にもどるのは、明治十四年四月のことである。残念ながら、この進退の経過は明らかにされていないが、「古川小学校沿革誌」には、つぎの記載が残っている。

全十四年四月本県若生精一郎ヲ校長

(月俸金三千円)ニ委嘱ス 校長赴任スルヤ岩淵三之助外三名ヲ供へ来リ授業

助手ニ採用シ 以テ職務ノ補佐トナス

時アタカモ、民間ニ政治民権論ノ勃興セシニ際シ校長ノ志想モ此ニ在ルヲ以テ部下ノ教員モ亦随テ其風ニ薫染シ出テハ則政事ヲ談論シ退テハ地方人民ニ向テ民権自由ノ拡張ヲ説キ或ハ休暇ヲ以テ他ニ出張シ演説ヲ為セシコトアリキ

全年六月 権訓導安藤元祐、玉手清

亨外助手二人突然職ヲ辞ス、是レ自己

ノ事情アリシコトナルベキモ、後、日

ナラズシテ退職者共同シテ私立小学校

ヲ設立シアリシヲ察スレバ別ニ勤務中

安国ル事情アリシモノノ如シ

県甲第九十九号ヲ以テ公立小学校設

置区域ヲ定メラシ本校ノ学区ヲ古川、

大柵、稲葉、中里ノ四ヶ村ト定メル

全年九月 校長若生精一郎病ヲ以テ

職ヲ辞ス 部下教員モ多少交代アリ

全年十月 桃生郡広淵小学校長本県

士族小川則要ヲ校長ニ委嘱ス 校長ノ

全十五年二月 校長小川則要及助手
木戸有直職ヲ辞(ス) 首座訓導玉手清
亨校務ヲ統フ
全年三月 県甲第三十号ヲ以テ前ノ
本県学期(学規)の誤記)ヲ廃シ本県
学事条例ヲ制定シ是ニ至リテ教員ノ委
嘱結約ノ法ヲ解キ学務委員ノ申請ニヨ
リ県令ニ於テ任用スルコトナル」
若生精一郎の妹鶴代の曾孫に当たる
吉井敬子執筆の「精一郎とその頃」(仙
台市立木町通小学校一〇〇周年記念号
『培根』所収)には、つぎの記述があり、
校長退職後わずか半年の療養生活のの
ち逝去していることになる。
「明治十五年、春未だ浅き二月末日、
数へ年三十五歳、過勞により劳咳にて
世を去る。妹鶴代も、また、劳咳にて
後を追う。」
*「教育すばる」10号
(1980・11)より転載